

人が守り未来へ繋ぐ世界遺産の現在地

(株)タダノが贈り届ける イースター島への貢献

取材・文

NPO法人 世界遺産アカデミー
客員研究員 飯島 一隆

チリ本土から太平洋へ西に約3,700km、絶海の孤島として知られるイースター島（チリの公用語であるスペイン語では“パスクア島”、島の言葉では“ラパ・ニュイ”と呼ばれ、世界遺産の「ラパ・ニュイ国立公園」が含まれます）には、古より存在するモアイの遺跡が点在します。

今回、海辺の東岸にまるで日の出を待ち焦がれるかのように佇む15体のモアイ像「アフ・トンガリキ」の修復秘話と、世界遺産登録後も継続してイースター島等に多大なる貢献をされている、遠く離れた日本の企業、株式会社タダノ 多田野宏一会長にお話を伺いました。

株式会社タダノ
多田野 宏一 会長

モアイ像修復プロジェクトの始動

—— 始まりは今から40年近くも前、イースター島の一部が世界遺産として登録されるより前に、当時の社員から一つの提案があったと、御社のウェブサイトで見ました。

1988年11月に放送されたテレビ番組で、イースター島の横たわったままのモアイ像が取り上げられ、イースター島の知事からのメッセージ「クレーンがあればモアイ像を起こせるのに」が放映されました。それを見た弊社の社員で上京していた高木から、高松に居た私と同僚の中山に連絡があり、「昨日の番組を見たか？クレーンと言えば我々ではないか」という話があったのを覚えています。当時私は事業開発室という、新規事業の企画をする部署を担当していたこともあり、クレーンでモアイ像を起こすことができたならそれは素晴らしいのではないかと、皆で話をしたのです。

—— 会長は当時、事業開発室の室長でおられた。すぐに実現すべく会社は動いたのでしょうか。

翌年の1989年1月に、最初にアプローチしたのは駐日チリ大使館ですね。飛び込みで訪問し、番組の中での知事のメッセージを伝え、クレーンを寄贈した場合に受け取って頂けるのかを打診しました。大使からは「非常にありがたい」とコメントをいただいたのですが、問題は社内の方でした。私は当時の社長（祖父の次男）に経緯を説明したが、思いのほか、怒られまして（笑）。「会社は慈善事業をやっているのではない、簡単に寄付というものではない」と。私もそれはそうだなと、我々3人は仕切り直しを迫られました。それから国の支援事業を求めて外務省を訪問したり、社内の機運を高めるような活動をしたりなど、方々をあたったんですよ。そのうち、社長が祖父の三男に変わって再度アプローチしたところ、割と面白がって賛同してくれたのは良かったですね。

—— それまでには約2年の月日もかかったようですが、1991年4月にはモアイ像の彫刻を模擬的に作成し、クレーンで吊り上げる調査を行って、10月には第一回の調査団の派遣もなされている。これでようやくプロジェクト始動！となったのでしょうか。

いや、大変なのはそこからでした。そもそもモアイ像は、すでにUNESCO等の学術的な調査が入っているモニュメントであり、彼らの了解なしに勝手には進められないということが分かってきました。特に倒れているモアイ像の多くは部族間の抗争による結果であり、歴史の証拠でもあるわけです。起こすこと自体が問題という考えもありました。その中で、アフ・トンガリキの15体は1960年に発生したチリ沖地震の津波によって流されたものであり、この修復は許容されました。

—— なるほど、モニュメントや文化財には、修復に当たって国際的にもルールが課されていますが、自然災害で倒れたモアイ像に対しては、修復への理解があったのですね。それでアフ・トンガリキに白羽の矢が立った。しかし当時の日本は企業メセナ全盛期でありつつ、その成果が必ずしも良いものばかりではなかったため、批判の声もあったと聞きます。

本プロジェクト着手以前には、ロンドンの新聞に心情的反対意見が掲載され、その記事が拡大されて日本の新聞にも掲載されたこともありました。こうした背景もあって、このプロジェクトは異国の一企業だけでは歯が立たない、我々も文化財のスペシャリストと団結して取り組む必要性を感じ、様々なツテを頼りました。

—— そこで、運命の石工との出会いを果たすのですね。

はい、当時石の文化財修復で一目置かれていた左野勝司さんです。しかし彼は職人気質で、世界的な重要文化財を修復するのは並大抵の覚悟では出来ないぞとおっしゃられ、その彼を口説くのはとても苦労しましたね。例えば我々はただ倒れたモアイ像を起こすだけでいいと思っていたんですよ。しかし左野さんは「文化財をできる限り当初の形状に戻しつつも、違和感のないような材料や方法を使って補強・修理を施すことが大切であり、そのためには周到な調査と計画が必要だ」と主張され、次第に文化財修復の難しさを理解していきました。彼はその後、奈

良文化財研究所に頼み込み、モアイ修復委員会の発足へと繋がりました。

修復するのはモアイ像そのものだけではないのです。もともとモアイ像が立座していた祭壇は100mもの長さがあり、大量の石を敷き詰めて構築されていたのですが、津波の影響ですべてバラバラになってしまい、広大な土地に大量の石が転がっているというのが修復前の風景でした。まるでパズルのピースを復元するかのように、その一つ一つを元の形に戻していく、と言っても人で持ち上げられるような軽いものではないので、クレーンを使って根気強くかつ慎重に動かす必要があったわけです。

モアイ像修復だけじゃない、タダノ社の貢献のカタチ

—— 1992年2月には、奈良でモアイ像修復委員会の第一回の会合が開かれ、国際的にも認められる体制でいよいよクレーンをイースター島へ運ぶことになるのですね。

1台目のクレーンは1992年9月にイースター島に初めて上陸することになります。贈呈したのは弊社のラフテレーンクレーンTR-500EXというものです。クレーンを島に運び入れるため、チリ大使は海軍の上陸用舟艇を用意してくださいました。当時、島にクレーンを運び入れるような港がまだなかったので、これも一筋縄ではいきませんでした。



●アフ・トンガリキ祭壇の石積み修復の様子

—— クレーンはどのように使われたのでしょうか。

モアイ像の石像はすでに風化等によってだいぶ脆い状態でした。そこで布を巻き付けて持ち上げることにしました。と言っても、落としたら大惨事ですし、このクレーンは50tまで持ち運べる能力を有しますが、中にはキャパシティを超える重量もあったため、引きずりながら移動させる手法もとりました。この作業には佐野さんら石工の指導のもと、慎重に行いましたね。

—— 1995年5月、ついにアフ・トンガリキは15体がそびえ立つ往時の姿を取り戻し、そしてその年の8月にラバ・ニュー国立公園はチリで初となる世界文化遺産に登録されることになります。

壮観です。感無量ですよ。特にアフ・トンガリキは地平の先の、日の出とともに照らされる景観は忘れられないですね。

—— 一方、寄贈したクレーンは1台だけではなかった。

はい、我々のモアイ像修復プロジェクトは、そもそもアフ・トンガリキの15体とその祭壇のみを対



▲モアイを包み運ぶ様子

象としており、それ以外のモアイ像については関与していません。しかしクレーンはその後もインフラ整備や港での荷役作業のために使われることとなり、島民の方々にも使い方を伝授してきました。2台目のクレーンは海の潮風にさらされ、15年ほど使用できなくなり、2005年11月に二台目のクレーンを寄贈しました。さらに2019年には三台目を寄贈しました（コロナ禍の影響により、到着は2022年となった）。ちなみに、1台目は前述の通り50tまででしたが、実は2台目は60t、3台目は100tまで吊り上げ可能な性能を持っているように、都度新製品を寄贈しているんですよ。



▲2台目の寄贈 ラフテレーンクレーンTR-600XL

—— モアイ像が修復され、世界遺産になった後も貢献を続けたタダノ社から見た、イースター島の変化についてお聞かせください。

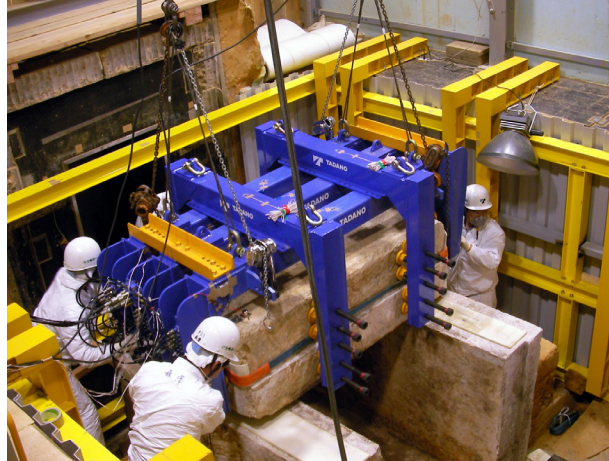
住民の生活の向上にはつながっているのではないのでしょうか。今では港も整備され、クレーンも直接入島できるようになりました。漁業中心であった島民の仕事においても荷役などの物流の仕事や、特に観光業の発展は大きいでしょう。かつてはまばらだった観光客は当時の7倍に増え、島の人口も約9,000人と当時の5倍になっていると聞いています。日本だけでなく、海外の旅行のパンフレット等でも、アフ・トンガリキの写真を前面に押し出しているのを見たことがあります。島の子供たちも、考古学に関心を持っていると聞きましたね。

チリからカンボジア、そして日本へ。 世界で活躍するONE TEAM

—— 多田野会長を含め、チリ政府等から数々の勲章等もいただいたようですね。ところで、御社はイースター島以外にも様々な遺跡修復に携わっていると聞きました。

世界遺産でいうと、カンボジアのアンコール遺跡の修復にも携わっています。弊社のサプライヤーが、たまたまカンボジアの大臣との繋がりがあり、紹介を受けたのがきっかけです。アンコール遺跡は1992年に世界遺産に登録されると同時に、危機遺産にも登録され、各国の支援のもとに修復作業が進められています。日本からの支援チームの一翼を担い、具体的には「ラフテレーンクレーン」「カーゴクレーン」そして「スーパーデッキ」と呼ばれる高所作業車を寄贈しました。アンコールの遺跡もかなり脆い状態になっていて、特に遺跡の上に立って作業するには、崩れる危険性もあったんですよ。そこで高所で計測や調査・作業ができる車両が機能したのです。実はこのプロジェクトも、奈良文化財研究所と、左野さんと協働しました。

▼ アンコール遺跡修復で活躍したクレーン



● 高松塚古墳の石室解体・修復で用いられた専用の治具

—— もはやONE TEAMですね！

ええ、チーム高松塚と呼んでいましたね。実はこの頃、奈良県明日香村の高松塚古墳の石室の解体作業にも携わってまして、これは左野さんから相談を受けたんです。石室の内側の壁面に価値があり、これを剥がす方法が検討されていたようですが、剥がすのは勿体ない、何とか石壁そのものを取り外すことはできないかと考えたんですよ。これはこれで大変でした。石室は16枚のブロックで構成されているのですが、石壁1枚1枚の大きさがそれぞれ異なっていたので、1枚1枚に適合した専用治具を開発しまして、これらを使って掴み、壊れないように取り外していく作業です。1枚2tはあって、さらにヒビが入っているようなものを運ぶのですから、1枚を運び出すのに準備も含めて1週間程度かかったと記憶しています。私も現場に何度も訪れましたが、貴重な文化財を壊したり傷つけたりしないように毎回ヒヤヒヤもんですよ。

最終的には無事終了し、安堵しましたね。文化庁長官からも感謝状もいただきました。

—— ところで冒頭の話に戻るのですが、1991年に模擬的に造ったモアイ像は、その後どうなったのでしょうか。

あれは地元高松市庵治町にいた友人の石工さんに彫ってもらったんです。模擬試験で使用したあとは倉庫に仮置きしていたのですが、モアイ像修復プロジェクトが終結した後になんてしようかなって。実は私たちのアイデアでは、イースター島とほぼ同じ大きさの小豆島に寄贈し、島同士の姉妹提携に繋がったら面白いんじゃないかと思って、双方に提案していたことがありました。

アイデアは面白かったのですが、なかなか距離も離れていますし、実現できなかったですね。そこで女木島が引き受けてくださって、今では女木島の観光名所の一つにもなっていると聞きます。



▲イースター島民との記念撮影。向かって左から3人目：左野勝司氏、中央：多田野宏一氏、その右隣：高木啓行氏

—— 多田野会長の発想と行動力には感服致します。その原動力は一体どこから来るのでしょうか。

我々が作っている機械は、基本的に重力に逆らった空間で作業をする環境に置かれています。ある意味、人類の歴史とは重力との闘いの歴史だと思うんです。ピラミッド然り、モアイ像も然り。こんな重いものをどうやって山から削って運んできたのか、古くは時間と人手をかけてきたと思います。今の時代のようにクレーン等の機械があっても、結局

重力との闘いには変わらないわけです。その最前線にいる我々が新技術でできる社会貢献は無いかなと常に考えています。

一方正直、モアイ像修復がここまでの社会貢献になることを見越していたかという、むしろその発想や創造に面白さを感じて始めた、今となってはそう振り返ることもあります。逆に最初からここまで大変なものだと知っていたら、やらなかった未来もあったかもしれません。

編集後記

エジプトのヌビアの遺跡群は、ダム建設に伴う水没を避けるため、分割して高台に移築する作業が行われ、その際にはクレーンも活用され、そしてこの修復が世界遺産の理念の誕生に繋がったとされます。造り、直し、守る。すべてに多田野会長のいう人類と重力の闘いがあり、その軌跡を後世に伝えることが出来たら、文化遺産はさらに輝くのではないのでしょうか。株式会社タダノは経営理念に「創造」「奉仕」「協力」の3つの柱を掲げているそうです。創造のきっかけは小さくとも、修復に至るまでの様々な選択肢で諦めを選ばず、イースター島への奉仕を今もなお続け、そして修復に関わった多くの石工を含めた専門家、チリ大使を含めた両国の関係機関、さらには島民の協力の元に成し遂げた世紀のプロジェクト。インタビューの終わりに、多田野会長が考える今後のイースター島との関わりについて尋ねると、少し間をおいて会長はこうお答えされました。「イースター島への貢献はタダノのライフワーク。次はまた十数年後、4台目を寄贈すると思いますよ。」

株式会社タダノについて

■ 事業概要

建設用クレーン、車両搭載型クレーン、高所作業車及び運搬機械等の製造販売

■ 所在

香川県高松市新田町甲34番地
(東京：東京都千代田区神田錦町2丁目2番地1 -18階)

1955年に日本初の油圧式トラッククレーンを発売して以来、業界のリーディングカンパニーとして、お客様の安全と地球環境に配慮した新たな価値を提供するための戦略を推進しています。2023年には世界初となるフル電動のラフテレーンクレーンを発売。「創造・奉仕・協力」の経営理念、ならびに中期経営計画(24-26)に掲げる「Reaching new heights」のスローガンのもと、「世界に、そして未来に誇れる企業」を目指しています。

- 株式会社タダノによるチリ・イースター島モアイ修復プロジェクトについての動画
イースター島モアイ修復プロジェクトがつないだ絆 前編 (24分) <https://youtu.be/fLpHavN6Prk>
イースター島モアイ修復プロジェクトがつないだ絆 後編 (18分) <https://youtu.be/XLULB5ckEXI>
- 株式会社タダノによるアンコール遺跡と高松塚古墳に対する支援について
<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2021/01/cambodia-project.html>
- イースター島、アンコール遺跡、そして高松塚古墳等の修復現場における詳細のエピソード
左野勝司 著：「石ひとすじ 歴史の石を動かす」